

# けんしゅうしましよ

1号  
R7. 6. 3  
文責 山本

単元名 大きい数の筆算を考えよう  
令和7年5月28日(水) 3校時  
児童 3年2組 18名  
授業者 T1 村上 靖 T2 板谷 裕康

## 【事後研より】

### 討議の柱

◎研究内容2「学び方を自分で選択・決定する場面」の工夫により、課題に対して受け身ではなく、主体的に臨むことができていたか。(パドレットより一部抜粋)

1. 子どもの主体性を引き出す仕掛け
  - ・「だれが一番大きいのが作れるかな？」という投げかけで子どもたちの目が輝いた。
  - ・「どんなことができそうかな？」の問いかけが、学びへの見通しと選択を生んでいた。
  - ・「どんな答えができる式を作りたい？」の問いで、やる気を高めていた。
2. 個別最適な学びの工夫
  - ・自分のめあてを自分で決められるシステムが良かった。
  - ・ノートやワークシートなど、学び方を自分で選ぶことで受け身ではなく能動的に学んでいた。
3. 課題設定の妙
  - ・今までの学習を生かしつつ、「ちょっと難しいけどやってみよう」と思わせる絶妙な課題設定だった。



◎研究内容3「なるほど・でもやっぱり続く交流」の工夫により、自分の考え方を広げ、深めることができていたか。

1. 子ども同士の自然な交流
  - ・式の全体交流後に「じゃあオレやってみるわ」というつぶやきがあり、交流が子どもの意欲に火をつけていた。
  - ・「ラッキー7だね」と先生が言った後、自然と仲間が集まり「すごい！」と盛り上がり、また自席に戻るなど、自由で協働的な学びの雰囲気があった。
  - ・「ミニミニ最高記録」に触発され、「そうたより下をいく！」と意気込む子もいた。
2. 教師の言葉かけによる価値づけが交流を促進
  - ・「ラッキーゾロ目」「最も小さいチャンピオン」などの楽しい価値づけが、他の子どもの意欲を引き出していた。
  - ・教師がさまざまな式の立て方を拾い、広げていったことで、他の子も「やってみよう！」という気持ちに。
3. 目的意識をもった問題づくりが交流の原動力に
  - ・「どんな式を作りたい？」という問いかけが、目的意識のある式づくりにつながっていた。(例:「ゾロ目の問題を作りたい」など)。
  - ・友だちの発想に触発され、「次は5桁で!」「最小の答えで!」と、思考が止まらない状態に。
4. 教師の支援・評価の工夫が交流を支えていた
  - ・座席表を持ち歩きながら即時評価や記録を行っていたことで、学びのようすが把握され、交流も活性化していた。
  - ・教師が問題を選んで提示することで、子どもたちが意図を感じ取れる交流が生まれていた。
5. 今後に向けて考えたい視点
  - ・「4桁の定義」が曖昧だったため、式づくりで混乱する場面があった。はじめに4桁に絞るなど、発展の順序も検討の余地がある。
  - ・「どんな視点で式づくりをしたのか」という問いを共有できるような仕組みがあると、本時の目標「計算のきまりの発見にさらに近づく。」
  - ・「問題を作った人の気持ちがわかった？」など、メタ的な問いかけも取り入れていきたい。
  - ・交流の「スタイル」や「バリエーション」について、授業研究に向けて整理しておくこと今後の実践に活かせる。

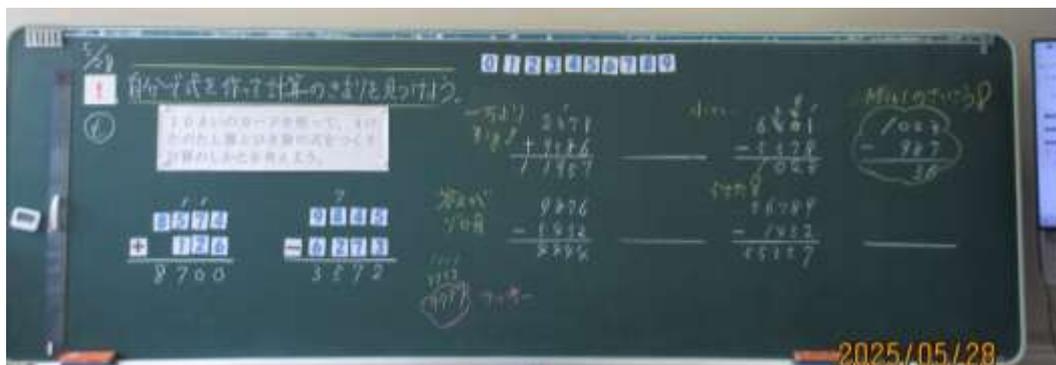
## 授業者：村上先生より

- ・算数に苦手意識をもつ子や、発言で雰囲気を乱す子も参加しやすい授業を目指した。協働的な学びの場は、作るのが難しくはあるが、座学が苦手な子にも効果的だった。
- ・確認問題は一律配布したが、苦手な子は答えを見ながら安心して取り組んでいた。
- ・協働的な活動が子どもたちに良い影響を与えていた。
- ・めあてやふりかえりは、今後の積み重ねでより効果的にできると感じた。今後は単発でなく、単元や週を通してのふりかえりに取り組みたい。
- ・子どもたちから5けたやゾロ目など多様なアイデアが出て、反応もよかった。

発言者	主な助言内容
横山指導主事	<p><b>【本時の授業から見た具体的な学び】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の見通しが丁寧に設計されており、自己の見つめ直しが可能になっていた。学習スタイルや問題づくりでの自己決定が見られた。</li> <li>・交流は自然だったが、さらに子ども同士のやりとりを広げる余地がある。学びのゴールがやや曖昧で、今後の明確化が必要。まだ教師と子どものやりとり中心だったが、今後は子ども同士のやりとりをさらに増やすことで、より活発な協働的学びにつながっていく可能性を感じた。</li> </ul>
熊崎主査	<p><b>【授業設計における教師のしかけ】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・低位層や定着層への手立てはよく見られた。今後は中間層への明確なアプローチが授業全体の底上げにつながる。教師のしかけが子どもの主体的な学びを引き出していた。</li> <li>・本時のように、自由度と意図の両立、協働と個別のバランスを意識した授業づくりが、すべての子どもを救う学びにつながる。一人ひとりの教師の実践には武器がある。それらを共有し、「集団での追求」を通じて授業力を高めていくことが今後の鍵。</li> </ul>
新井課長	<p><b>【発達指示的機能を活かした授業づくりと生徒指導の接続】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒指導的な視点（安心感・共感・自己決定）を授業に取り入れることが重要である。</li> <li>・「めあて」の明確化と「できた感」の育成が主体的な学びの土台に授業づくりをしてほしい。</li> <li>・交流には視点の明示が必要で、目的をもたせることが大切である。</li> <li>・選択に理由づけを求める場づくりで、自己決定を深めるので、授業の中で取り入れていくとよい。</li> <li>・トライアンドエラーを繰り返しながら、主体的に授業改善を進めていくことが求められる。</li> <li>・新しい研究は、授業と生徒指導の統合を目指すチャンス。</li> </ul>

### 黒島校長より

- ・ゾロ目の導入や雰囲気づくりが「おもしろい」と思わせる工夫になった。この授業を通して算数が好きになった子がいたはず。
- ・プレ研究での活動が無駄ではなく、子どもの学びにつながっていると実感。5けたの発想など、子どもたちの力を引き出す想定外の成果があった。
- ・子どもを「泳がせる」ことで主体的な学びを引き出した。「普通の子」を光らせる授業ができていた。
- ・できたことをしっかり価値づけることで、子どもの自己肯定感が高まる。



#### ■今後の予定■

- 6月23日（月）全校研①に向けた指導案検討
- 7月 7日（月）全校研①授業・事後研
- 7月14日（月）公開研究発表会に向けて①授業単元の計画、内容の確認
- 7月24日（木）公開研究発表会に向けて②指導案検討